

教えて！先生

日本人形の衣裳に迫る

2017年

第2回

有職の色

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。業界のスペシャリストを講師に迎え、衣裳の基礎から応用まで教えていただきます。知識の習得や再確認、セールストークにお役立てください！
第2回は「有職の色」です。前回に引き続き、松井幸生さんに教えていただきます。

松井幸生さん
株式会社善助商店社長
Matsui Yukio

金襴織物・裂地の製造卸商を営む。菅田屋勤兵衛から数えて13代目。京人形商工業協同組合副理事長。平成12年伝統的工芸品産業審議会臨時委員任命。翌年、伝統的工芸品産業の奨励賞を受賞した。

今日の先生



有職においてメジャーな色

蘇芳（すおう）

——第2回を迎えます。今回もよろしくお願いたします。今気になっているのが女雛の衣裳です。今後のテーマは、女房装束、できたいと考えています。

松井さん 女房装束ですか。おもしろいテーマだと思います。第1回では黄櫨染、麴塵という色について説明しました。女房装束にもつながることなのでもう少し色について話を進めていきたいです。第2回は有職の色としましょう。

蘇芳という色があります。読み方は「すおう」。赤系の色で、やや青味がある赤色と表現することができます。有職故実などの昔の

文献を読んでいると、よく目にするのが蘇芳色です。『延喜式』（647年施行）には「深蘇芳」「中蘇芳」「浅蘇芳」との記載が見受けられます。目を引く赤色である蘇芳色は、公家が身に着ける狩衣をはじめ、十二単の襲色目などの配色にも使われてきました。

——資料によると、蘇芳はインド南部やマレー半島に生育している樹木のこと。赤色の色素をもつ芯で染めて明礬や椿などを燃やして発色しているとあります。また漢方薬としても用いられ、正倉院には薬物として保存されていたとか。正倉院の「黒柿蘇芳染金銀絵如意箱」は、黒柿造りの箱全体を蘇芳で染めたうえに金銀で花文様が描かれています。紫檀に似せる

ために蘇芳で染めるのですね。

松井さん 正倉院を代表する工芸品もそうですが、やはり布や糸に最も多く使われていたと思います。能装束や小袖の染色にも多用されています。

——女房装束の話聞く前に、他にも知っておいた方が良い色がありそうですね……。

松井さん 勘が鋭いですね（笑）。



ゆきお
幸生の

ワンポイントアドバイス
僕が知る限り、蘇芳は魍魎（自然の精気から生じる化け物）から守ってくれる、厄除けになる色と言われている。

高位の色で禁色でもある

濃色（こきいろ）

松井さん 濃色は別名を深紫といえます。紫根と呼ばれる紫草の根を繰り返し染め、黒味がかつたように深い紫色をしているのが特徴です。深紫に対する色は薄色といい、別名を浅紫と言います。

——中国の前漢時代の武帝は紫を好み天帝の色として禁色とされていたほど高貴な色なのです。

松井さん 日本においても、聖徳太子が制定した「冠位十二階」において、もつとも高位な色とされ、深紫や黒紫も同じように扱われました。大宝元（701）年の文武天皇のときには、黒紫が親王の色とされています。この区分は

養老令でも踏襲され、名称が深紫に改められたと言われています。——紫色は世界でも高貴な色であると聞いたことがあります。

松井さん 帝王紫ですね。イタリア、ギリシャ、エジプトといった地で幻の色として知られています。帝王紫の色は貝から抽出されます。貝が持つ特殊な腺は太陽に当てると紫色に変化するのです。それを抽出するために大量の貝が必要となるため、皇帝や貴族しか使用できない色とされました。ロイヤルパープルとも呼ばれます。

——高貴な響きですね。話は日本に戻り、身に着ける人の年齢によって、お召しになる装束の色が変わるといのは本当ですか。

松井さん 本当です。平安時代の女房装束の打袴の色は本式が紅色（紅袴）で、若年は濃色でした（ワシントンアドバイス参照）。

年齢に限らず未婚・既婚で異なる色合いの装束をお召しになることもあります。ただし、濃色は未婚者が着用する袴の色と言われることがあります。有職故実の文献に明記されていません。

——先ほど「若年は濃色」とうかがいましたがいくつまでを若年と呼ぶかという問題になりますね。

松井さん 男性の単などの場合は16歳になると、濃色ではなく紅色をお召しになるというのが決まりました。婚姻年齢が今よりも若かった時代は、16歳という年頃が未婚・既婚の境界線だったのかもかもしれません。

——有職の色は奥が深いですね。前回のときに「禁色」という言葉を覚えしました。許された者しか身に着けられない色と聞くとステータスを感じさせますね。

松井さん 『延喜正台式』では禁色に三つの意味を持たせ、公式に禁止していました。その一つが禁色七色の使用不可です。支木、黄丹、赤色、青色、深紫、深紅、深蘇芳の七色です。このルールは時代が進むにつれて緩くなつていき、明治以降は天皇・皇太子がお召しになる御袍の黄櫨染と黄丹の二色のみになりました。



ゆきお
幸生の
ワシントンアドバイス

令和元年「即位礼正殿の儀」に臨まれた秋篠宮ご夫妻の長女眞子様と次女佳子様がお召しになった袴の色が濃色だった。

平安時代のトレンド

二 藍（ふたあい）

松井さん 最後に、二藍についてもお話させていただきます。前回触れることができませんでしたが、御袍の裏地の色について少し説明します。天皇の黄櫨染御袍の裏は紫もしくは二藍と決まっています。青色御袍（麴塵）の場合は裏地が黄です。皇太子の黄丹御袍の裏地は二藍と決まっています。

——さすが流行色の二藍。よく登場しますね。しかし、いまいちどのような色かイメージがつかみません。

松井さん 二藍は、青と赤を掛け合わせた紫系の色です。青色は藍を使い、赤は呉から来た藍すなわち呉藍を使用。二つの藍を掛け合わせたことから二藍と呼びます。高価で庶民の手に届かない紫根染めではない紫系の色として、二藍は男女問わず好まれました。

——資料を見ると、二藍は「若年者の夏直衣」と記されています。まず、直衣が分かりません。

松井さん 素直ですね（笑）。装束の直衣は、現在でいうところのジャケットのような上着です。普段着に近い服装なのですが、天皇の許可があれば直衣で参内することも可能になりました。

ただし、原則として中納言以上、大臣の子孫、そして公卿の中から選ばれたエリートのみ。若年の公卿が着用する夏物の直衣は、二藍の穀織で文様は三重襷文の袍でした。直衣は現在では着用する場面が限られています。天皇の「勅使発遣の儀」、神武天皇祭と先帝祭の「御神楽の儀」などで用いられます。

——今回はここまでですね……。最後に一つ！穀織って何ですか。



ゆきお
幸生の
ワシントンアドバイス

穀織は公家のみが装束に用いる織物。紗の一種。織目がもみ米を並べたように見えることから穀織との名が生じた。

参考文献・八條忠基著『素晴らしい装束の世界』（誠文堂新光社、2005年）
・吉岡幸雄著『日本の色辞典』（紫紅社、2000年）
・鈴木敬三著『有職故実大辞典』（吉川弘文館、1996年）

※本連載は隔月連載です。第3回は2022年4月号に掲載します